ドクター・ナダレンジャーの教育イベントにおける「つかみ」の実践例

Example of practice of a grip in the education 2

納口 恭明 [1]
Yasuaki Nohguchi[1]

[1] 防災科研
[1] National Research Institute for Earth Science and Disaster Prevention

茨城県では専門的な知識を持った大学や研究所の現役・OB などを学校に派遣し、子供たちが理科に関するユニークな実験・観察や自然に親しむなどの直接体験を通して、理科への興味・関心を高めるための「おもしろ理科先生派遣事業」が一昨年からはじまった。筆者はこれに「ドクター・ナダレンジャーの自然災害科学実験教室」という講座名で登録し、おもに幼・小・中学生およびその保護者や先生に授業を実施している。また、筆者の所属する独立行政法人防災科学技術研究所では高校生や一般の見学者にも同様の実験教室を開いている。

一般に、普段、大部分を占める災害にまったく関心のない人への教育ほど防災に寄与するものはないといって過言ではないのだが、関心のない人への教育ほど困難なものもない。災害関連イベントに出席したり、筆者を講師に招待したり、見学に生徒を連れてこられる先生はたとえ災害への関心が高かったとしても、つれてこられる生徒のほとんどは関心の無いのが普通である。昨今のように災害が頻発しているときはそれほどではないが、地学・災害といったもののイメージは「陰」であり、「地味」である。このイメージから始まっては、教育効果は望めない。

本報告は、昨年に引き続き、筆者があらたに開発し、磨きをかけて、科学実験教室で実施している「陰」を「陽」に「地味」を「派手」に変えるための「つかみ」の実践例の紹介である。